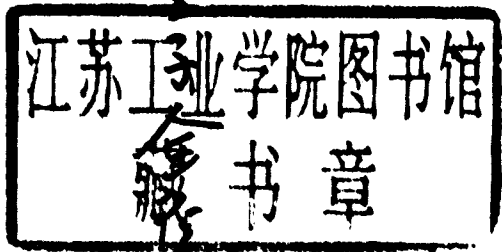


鄂上學



第Ⅱ期

第十六卷

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第十六卷
第二十二回配本
(全二十六卷)

一九八九年一〇月二四日 発行

定価五六〇〇円
(本体五四三七円)

著者 野の 上が 彌や 生え 子こ
発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋一五五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・二六五四二一
振替 東京六・二六二四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

一九六七年（昭和四十二年）

一月二日 日 朝曇後雨

めづらしく御降りの元日であつた。いつそ静かにしんみりとたのしい。

朝執筆、数行。そのあとホールのまきストーヴをたきつけ、茶の間のガス・ストーヴにも火をつけ、みんなが来た時暖かなやうに支度。お雑煮はお供への分だけにして、私はつねの如くお抹茶とカステラと空也もなかに、おせんべい。十時すぎ謙一があらはれ、つゞいて茂吉郎、正子つれだちて見て、新年おめで度うをいひ交はす。正子も熱とれてよいあんばい。船橋とはデンワでおめで度うの交換をしたさうな。おせちのもので葡萄酒でプロジット 燿三、三枝子、三千子もあとより参集。かうして一家平安無事で迎年のことありがたい。

夜教育テレビで林武氏の画の話をきく。美学的な分析にはたどくしい語彙がでて来るが、経験的には耳傾けるべき言葉が多かつた。抽象画のもんだいで、抽象したものを具象化すべきだとの説はおもしろかつたし、なんとかして画にしようと苦心さんたん思ひに凝らしてゐるうちに、突然一本の中核になる線が見つかる。それをシンにして画が形づくられ、構成され、色づけされる云々——これは小説の仕事にも通ずる。この線を見つけるまでの心魂の練りこみを待たないではよい作品は

書けない。

一月二日 月 曇ばらく／＼雨

追加の年賀書き。いつも正月の元日を待たないで中共からとどいてゐた新年の祝賀のハガキが今年はまだ一枚も来ない。これも紅衛兵以来の異変で、こんなことまでブルジョワ的な虚礼として除かれたのか？ そんな疑ひをもつてゐたところ、今日東四四條の彭夫人の一枚とどく。深紅に天安門だけが黄いろな織物で張りつけ、キリガミにも毛主席の語が書かれてゐる。これで見れば、かうした年賀状も売りだされてはゐるらしい。しかも一般人はとにかくとして、なにかの職務に地位をもつ人はかへつて使用ユウなのであらうか。それだけに北京の態度の苛烈さが伺はれる。茂吉郎のところへは科学かんけいの人から一枚とどいた由、安達昌平、明子、詔一うちそろつて年賀に来る。詔一（傳）も信男もこの春は就職とのこと。

一月三日 火 晴

からりと美しく晴れて、外套なしでおもてに出てもゐられるほど暖かい。それは正子、謙一をさそつて市河から耀三、原さんのところへと年賀の顔だしをしたからである。私だけは三枝さんにもちよつと。留守であつたが。――

茂吉郎は坂口さんに誘はれ、松戸の公営住宅にはじめて台さんを訪問した由、台夫人はまだ順天堂病院に入院中で、新年だけ帰宅してゐるとの事。千枝子さんの病気だけはまったく台さんにはおきのどくである。

今日は横山さん来る日であつたが都合で来らず、かへつて静かでよい。夜はM・M・Kみなこちらへ来て、おでんとお節のもので晩食をとにする。

一月四日 水 晴

執筆ほんの少し、おひるまへ淑恵ちゃんが昨秋北軽へとびこんだ馨の仲間のK・Oボーイの平野君よりの鮭をもつて来て、いろ／＼学校のこと、馨のことなど語つて行く。馨に田中家をつがせる、つがせないの問題やつと落着で、馨は他家へ嫁いでもよいことになつた由、K・Oのボーイ・フレンドの両親がそろつて音楽家といふ青年の存在についてもきく。あまり長く親しくしてゐる為、却つて結婚にまで踏みきれないところがあるらしい。淑恵はなか／＼しつかりもしてをり、こんな話や、また勉強のもんだいについてぶつつかつて話す相手がゐないので、今日はすべてをぶちまけたやうな有様であつた。そのあとXXさん来る。この新年はペラ／＼ものながら和服。お茶道具の販売会社で社員の女たちにも土曜日に先生が来るお茶のけいこをさせるといふ店だから、こんな和服も欲しく、また必要でもあるらしい。この女も将来の身のふり方にいろ／＼悩んでゐるのだが、なんともしてやりようがない。

シヤケ耀三がちよつと来たので分ける。夜はこれは田中豊吉夫妻がウスキからもつて来たといふエビをフラヒにして淑恵がどつきりもちこんだので晩食。ところ暮れに耀三のところへ湯殿からドロボウが忍びこみかけた話をきく。窓のカギを忘れてゐたのださうだ。ドロボウは外側の木の枠をはずして忍びこんだが、湯殿から廊下へでるドアの鍵はかかつてゐたので、それを破はしては音で目

を覚させると考へたかして侵入を中止、外ワクをちゃんと前の通りにして出て行つたので、朝三枝子が湯殿に泥の足痕を見つけるまでは、ドロの入つたのに気がつかない位であつたといふ。ドロスケは燿三のところをあきらめて、前のドウチ(銅直)ヨク氏の家をあらした。中と手なれな賊であつたらうと成城署ではいつてゐたとのこと。

一月五日 木 晴

執筆少と。

三枝さん朝年賀に見え、茶の間ですこし話す。婦人公論がごた／＼で笹原氏はやめとなるらしいとのこと。今春の婦人文芸賞などまたそろ／＼準備を要するの。今度は伝記のももとする事にしたらなどとも話しあふ。

午後謙一が来て三疊にあたらしく吊つた棚に書物を移動したりをすつかりやつてくれる。三千子は約束だけで、少とこのところ浮かれすぎてゐるらしい。夜は昨日のえびのフライがまだどつさり残つてゐたのでMの家の三人をよび、それをもとにして、お坐敷テンブラで会食。

ハノイに行つてゐるニューヨーク・タイムズのソー「ル」ズベリ記者の報導が、米国にベトナム戦争のほんとうの姿を伝えるに大に貢献してゐるらしい。良識のある米国人はジョンソンにはいよ／＼批判的になつてゐるのはたしかだが、一般民衆の意識には富と力に奢り過ぎたアメリカ流の自負がなにより先きに働いてゐるわけだ。

一月六日 金 曇寒入り

昭和42年1月

執筆、寒入りだけに中この冷えこみ。

午後和子が来る。船橋もやつとみんな病人でなくなつたらしい。モキ一家とうちそろひスキ焼で晩食。

一月七日 土 美しき冷たい晴

執筆、やつと進度よし。午後三枝子三千子のスカラシップ合格の発表を報じた今日のサンケイ新聞をもつて来る。五十人に一人といふ厳しい競争率を突破したわけ。女学生の合格者のうち二人のシヤシンとインタヴィュウの記事があり、三千子は筆頭。父から祖父母、市河のおぢいさんの名前ももとより挙げられ、サヴ・タイトルには野上弥生子さんの孫とまで念(入)りなことである。これはいへば三千子へかかる一種の圧でいつそ可哀さうな気がする。ひとの悪い連中は、裏面からなにか工作したかのやうにも考へかねないだらう。ただ彼女の娘時代のかうした輝しい生存が、どうか将来とも損はれずつゞく事をひたすら祈願する。

和子に三千子が逢ひたがつてゐたのに——と三枝子は残念がつた。昨夜のスキヤキの時、何度デンワしたのに通じなかつた事を話しておいた。今日は三千子はもう図書館に出かけたとの事。ちようど美容院へ行つて来た和子が、船橋へ帰るまへに三枝子だけにはちよつと逢へた。

お小遣ひとして二千円渡す。

一月八日 日 朝 ママ

今日は執筆半ピラなれど三枚、これがこのごろはもつとも沢山書けた日、あはれなる哉

午後ベッドで山崎氏のアントニオ・グラムシを読む。イタリア共産党ではトリアッチ以上の人であつたらしいのに、その名前を知つたのは、先日来朝したサルトルの発言の中ではじめてであつた。これは私の無知によるのみでなく、活動期の大部分を獄中で過し、若くして病死（マ）この思想家で芸術家でマルクス主義のもつとも純粋な実践者だといふこの人はあまり普遍的には知られてなかつたといふ。ロマン・ロランなども親しかつたやうで「直視する深みのある眼、房ふさした密集した髪に縁どられた大きな額をもつた、ちいさなせむし男……」さうして弱い肉体の中に鉄の魂と評した言葉が巻頭にかゝげられてゐる。シャシンの肖像はそれをいつそう明確に読（者）に示す。山崎氏の行文はなか／＼立派で細かいが、あまり多くを語りすぎてゐるきらひを免かれない。もつと描写を入れた方が伝記としては読者に魅力をかんどさせるだらう。

今日総選挙の告示。米の海兵隊がつゐにメコンデルタに上陸。

一月九日 月 晴

執筆、進度よし。午後藤田圭雄氏来訪。彼はこのごろは川端氏よりは太田氏の方へより多く接触してゐるらしい。明子もそのあと来る。新しいうみたての玉子持参。かうした心づかひにたいして、私が報ゐるのはお菓子の折などもたせて帰すほかはない。

一月十日 火 晴

執筆の進度はこのところ三枚を保つて来た。

朝のドイツ、フランス語をつゞけてきく為には、七時まへにおきて身支度して階下にをりなければ

ならない。このごろの寒さではそれは強い決意の要る事だ。携帯の小型テレビを寢室においたらベッドの中でこのレッスンだけはとれるわけ故、一つ買ふ事を暮れのうちから考へてゐたが、今日茂吉郎が学校からデンワで、いつもの渋谷の店に命じてとどけさせるとのレンタルがあつた。彼が帰宅した後になつて店のものが持参。三万円でよいとのことで小切手で支払ひ。五千円ほどのサーヴイスになるらしい。

今日弥一氏のけいこ。「羽衣」を同吟でさらへて貰ふ。下掛宝生会の主催として、安倍さんの追善誂会を春になつて催す事を、松本さんなどと相談するやう提案しておいた。

一月十一日 水 曇

このごろは寒気はきびしくとも美しい晴れで、書齋など終日日光に充たされて、午後などストーヴの火がきえてもしばらく位は困らないのに、今日は朝から曇つて午後になつても温度あがらず、今年一番の寒さとテレビなど報ずる。

テレビといへば昨夜から新しい携帯用をベッドのよこの椅子にのせたので、朝は考へてゐた通りベッドでドイツ語をきく。予期にたがはず旨く行つた。疲れも感じない。そのあとでベッドをでてゆつくり朝の身仕舞ひをして執筆をはじめられる。もつと早く買へばよかつた。お金の心配などなんにもいらなかつたのだから。

嵯峨根氏へ燿三たちもとの教へ子仲間から贈るモーニング・カップその他のセットを宮永さんの店の番頭へデンワで依頼。

一月十二日 木 曇夜雨、雪のところもあつたらしい。

執筆、一兩日まへほどではないが調子おとろへず。ポータブル・テレビの為におく台を拵へたりいろく工夫。いつか湯浅さんところにあつたやうな日立のテーブルの小型なので、このベッドと壁のあひだに入れられる位ちいさいのがあつたらと考へる。一つちよつとした家具でも新しいのができると、それにふさはしい何かをまた求め度くなる。しかしゲーテとの対話の中にエッケルマンが書いてあつたやうに、青い絹の椅子一つでも彼のころからちよつと平常の落ちつきを失はせたことを思ひつた(り)する。

夜に入つて昨夜正子のところへとどいたと同じセイリたんすの三段のをかつき込まれ、また寐室に新しい調度加はつた。三千二百といふベニア板の安物ながら感じはわるくない。夜S来る

一月十三日 金 小雨曇

執筆、午後セイリ・ダンスにシャツ類など仕舞つたついでに、お正月の装飾のためにだしてあつた小羊の毛皮をしまつたり、テーブル掛をとりかへたりする。こんな雑事を気軽にする気になるのも、からだの調子がよいせゐに違ひない。

中共の文化革命には多くのデマもとび、真相はまだ判明しないが、中とのさわぎになつた事はほんとうらしい。延安に隣り組のやうなかたちに住み、革命後もその結束の乱れない点では、古来からの革命に例のないものだと思はれてゐるが、「時間」の推移には到底避けえないものが中共にもやつぱり到来したとしなければならぬのであらう。それにしてもベトナムの戦争中だけにその影響の

強さ、大きさは残念この上もない。

久しぶりに幾分あたたかい晴れ。執筆順調、といつても半ピラ三枚である。燿三が学校に行く途中ちよつと寄る。坂井夫妻がこの日曜日にたぐね度いと伝言をもつて。あのちいさい娘二人にはおもしろくもない事であらうに。——しかしこれがフランス流のエチケットで、例年の訪問を中止する事はなにかの意味づけになるのであらう。また小娘たちはかうやつて伴はれる事で、「社交」といふものを学ぶのかも知れない。白杵からカイボシやつとどいた。

一月十四日 土 晴夜強風

一月十五日 日 晴

S朝たつ。京都の停年後、イタリア語の彼には弟たちのやうに新しいポストはえがたいのをいつも語るが、しかし家だけはこの家でも、またそれは現在でも彼の名義になつてゐる庭の中の家でも、住んで行けるのだといつた話をしあふ。この家は血統的に謙一の所有に帰すべきだが、所有権さへ動さねば、身うちの誰が住んでも円満な話しあひにすれば住めるわけだ。先日正子へもそんな話を、燿三の方の建増しのことから話しあつた。正子はいまの家の方に住み度いらしい。茶の木の垣根まで位建増しをすれば、どんなにもひろい身もちのよい家ができるはずである。

坂井氏流の時間で四時近く親娘四人つれだちて来訪。そのまへに燿三が来て炉の火もたえず赤々と燃やしたし、それにガス・ストーヴも今年は引きこめるので暖かく迎へられた。マダムにボルドーとアルジュールズとの距離をたしかめたりも話題となる。いま書いてゐる「一隅の記」の参考。サ

ルトルとボーヴール評。彼女の女性観は私の考へ方にマダムも一致。見事なシクラメンの鉢を頂く。娘ふたりには暮れから用意してあつたモロゾフのチョコレートそれに日本語のお伽話などよむといふ姉さんにうさぎのラバット　クルマの運転に支障ないやうにほんの一杯づゝついだ「宗麟」をマダムはおいしがつた。彼らが去ると、入れ違へに裕吉さんと和子を迎へ、三千子をも加へてスキヤキで会話。裕吉さんすつかり元氣になり、また中とおシャベリにもなつた。お父さんの良吉氏とそつくりの口調、氣味がわるいくらゐである。

書き落してならないのは、昨日東京新聞の夕刊に「家族交歓」の題で出たシャシン。暮れにお庭の池の周りに集つたところのスナップ、みんなにこゝしてはなはだよく映つてゐたことである。三千子の文章もよく書いてゐた。

一月十六日　月　晴

執筆順当。

夕方暮れて豊田実氏例年のごとく年賀に見える。お茶の間へ通し、宗麟一杯あげたらたいそう氣に入つたふうなので、ストックの一本を呈上。

昨日坂井さんに頂いた淡ピンクのシクラメンの一鉢なか／＼立派なものであつた。私の書齋には正子のプレゼントがあり、二つながらは慾張りすぎる氣がしたし、正子が花は大好きなだから彼女に呈上した。ほんとうはこの方が私にも望ましかつたのだが、しかし与へたあとには氣もちがよかつた。

一月十七日 火 晴

執筆。謙一が私の欲しがつてゐた小型の額を新宿から買つて来てくれた。西出大三氏の今年の美しい年賀ハガキを入れて、寢室の枕もとの横の壁にかけようと思ふ。

一月十八日 水 晴

執筆、今日は二枚足らず、こんな小文でも練り込みを怠るまいとすれば、創作と変はりのない苦心が要る。ウスキヘカイボシの御礼。京都へもハガキ、Sにイタリア文学史でも訳したらといつてやる。

一月十九日 木 晴

執筆、ボルドーにすこしペンを費し過ぎる気がするが、とにかく過剰なら書きあげてセイリするほかはない。

「朝日」の記者が南ベトナムの病院に收容されてゐる、おもに幼い子供たちの悲惨な怪我がやけどを詳細に達してゐる。米軍の爆撃をそば杖をくつての犠牲である。ベトナムを救ふたてまへの爆弾やナパーム弾がどんな結果をもたらしてゐるかをこれは明白に世界に示すものである。

谷川たき子さんからカイボシの御礼。三月に俊ちゃん夫妻を迎へかた／＼あの二人のおちびさんをも連れてハワイへ行くとのこと。静よりも入れちがへにハガキ、R子へもカイボシを分けてあげるとよいと思ふが、小包をつくる暇がない有様。

一月二十日 金 晴

執筆、気候がいくぶん和らいだ傾き。嶋中雅子さんよりもカイボシの御礼の便りにお子さんのこと、社の様子の事などこまかくと書いてあつた。

東京新聞よりこの間とつた家族一同だんらんのシャシンとどく。だんらんといつても庭で池の周りでのスナップ。しかし新聞に出た時よりははっきりしてゐるし、右手の隅のポチも新聞ではただ黒いかたまりであつたのに、鮮明に犬になつてゐる。

一月二十一日 土 晴

執筆、変はり事なし、ウスキからカイボシまた二束とどく。

この日朗子が来たらしい。この日からの日記二十五日になつてつけるので、不明

一月二十二日 日 晴

執筆、昨日は百合子さんの御命日、いつもとどける花を送るのを昨日夜に入つて思ひだしたので、村田に命じて持つて行かせる。宮本さんでも今度はせんきよ騒ぎで御命日どころではなからう。

一月二十三日 月 晴

執筆少く。美紗ちゃんから銀座に来るゐるとのデンワがかゝり、一時間ばかりして見える。この八日？に帰朝。米には二年になると所得税をとられるので、まる二年になる一と月まへハイデルベルグでの講義の周旋を先輩にして貰つてヨーロッパへ行き、それから仏、ドイツ、ポーランド、最後にロシアに廻つたとのこと。アメリカが田舎だといふ実感をつくづくヨーロッパで味つたとのこと。これは大きな成長で、三枝子なんぞよりいつそ眼が高い。アメリカの学生の数学の知識は低く、大

学院生でやつと日本の大学ぐらゐること。それに比べるとロシアでの数学者の集会では6000人がことごとく数学者といふ盛会でだあとなたといふ。彦さんは帰つて助教教授になつた由、なか／＼優秀なのらしい。

鎌倉で両親、堯彦との生活の交じりあひが彼女の重荷になつてゐるらしい。小石川の家をいま外人に貸してあり、六月にはあくので、そのあとに入り度い希望だといふ。栄華飯店のシナ料理をとつておせいおヒルを俱にする。その為夜まで胃が重く、夜は牛乳だけにした。

一月二十四日 火 晴

執筆、カイボシをR子へ小包にしてだす。静子のハガキにR子が好んで食べたのを思ひだしてゐたので、ウスキから追加があつたし、書物二冊とともに送つてやつたわけ。あげるのはいくらでもあげるが、こんな小包まで自分でつくるのだからなか／＼世話がやけるのである。例年の事故ふたばこ氏へも、三枝さんへもとどける。今日は横山さんが来たのでこんな事も可能。

午後ベッドで森有正氏の「展望」の一文をよむ。なか／＼細かい表現。ノートル・ダムの描写などすばらしい。彼がここで語つてゐる経験なるものは「悟り」に近いものとしてよからう。しかし彼の感性には可なりセンチメンタリズムがある。これは故国を遠くはなれて住むうちに次第に養はれたものではあるまい。同時に彼の社会意識は特殊なものがあるらしい気がする。

夜教養番組の日本人の出生しらべの中で、大分県の丹生の発掘とその出土品が沢山示されてゐるのを見るうちに、小手川の家が丹生から出たものであることが改めて思ひだされた。豊後風土記など